

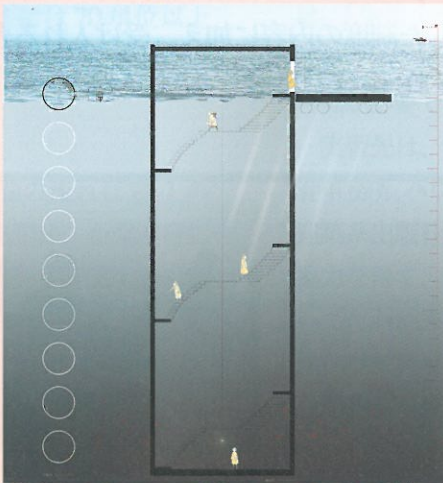
桜建会報

2013-March
No.96

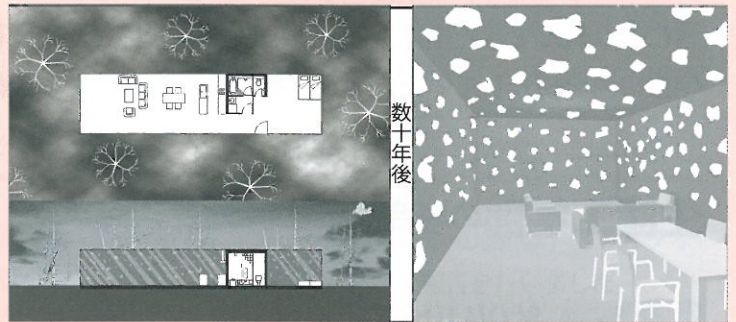
OKEN

日本大学桜門建築会

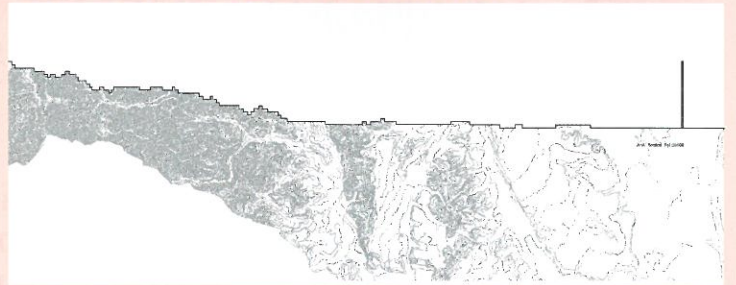
<http://www.okenkai.jp/>



第4回桜建会学生コンペ優秀賞「光をとらえる筒」富樫由美



同・優秀賞「MELT 死にゆく自然の中で生きる建築」新城雄史



同・優秀賞「100kmと呼応する建築」落合俊行



同・優秀賞「砂漠の塔楼 身体・建築・風景のスケール感」三浦洵

contents

特集／建築系インターンシップの実際——2

生産工学部(松井勇教授 藤本利昭准教授 企業から 学生から)

大学院・他学部の場合

トピックス／第4回日本大学桜門建築会学生設計コンペティション結果報告——8

研究室紹介／地盤・基礎構造研究室——10

トピックス／「笠井芳夫先生・毛見虎雄先生を偲ぶ会」の報告——10

片桐正夫先生を悼む——11

斎藤賞・加藤賞・桜建賞平成24年度受賞者一覧——12

事務局だより——14

学部ニュース——15

建築系インターンシップの実際

4学部5学科からの報告

1997年、当時の文部省、通商産業省、労働省による答申以後、本格的に始まったインターンシップ。学生が一定期間、企業などの中で研修生として働き、自分の将来に関わる就業体験を行う制度である。就職活動に先駆けて行われる実社会での仕事の体験は、ミスマッチを防ぐ役割ももつ。また、大学院では、一級建築士受験資格要件の中の実務経験に対応するものとして実施されている。

そこで今号では、各学部・学科のインターンシップの取り組みについて特集した。約50年におよび生産実習に取り組んできた生産工学部には、必修科目として蓄積した制度の内容に加え、受け入れる企業や参加した学生の声を紹介していただいた。その他の4学科にもそれぞれ、現状と見直しなどをレポートしていただいた。

生産工学部の場合



約半世紀にわたる 生産実習の歴史と蓄積

松井勇 (生産工学部長)



インターンシップ推進協議会主催のインターンシップ成果発表会で説明する学生

インターンシップの誕生と変遷

生産工学部は、1952(昭和27)年に工学部(現理工学部)に設置された工業経営学科が前身で、その後、65(昭和40)年に学部として改組されて今日に至っている。学部誕生の時に、理工学部と工学部との相違を明確にするために、「経営・管理能力を兼ね備えた工学技術者の育成」と「産学連携教育の強化」を教育目標に掲げ、その目標達成のコア科目としてインターンシップ、科目名称は「生産実習」が3年次1カ月、4年次1カ月の計2カ月の必修科目(各4単位、計8単位)としてスタートした。

その後、高度経済成長の終焉などにもない、企業の長期の受け入れが困難な状況が生じたことから、現在は3年次に「生産実習Ⅰ」(2単位必修)と「生産実習Ⅱ」(2単位選択)と改編し、学生の意思によって

1カ月の実習が可能ないように設置されている。毎年1400名の3年生が夏季休暇中に原則として2週間のインターンシップを体験しており、約700社の民間企業、県・市町村など公共団体・独立行政法人などの研究機関にお世話になっている。

支援体制とキャリア教育の徹底

こうしたインターンシップ(生産実習)を円滑に行うための組織は、9つの学科(機械、電気・電子、土木、建築、応用分子化学、マネジメント、数理情報、環境安全、創生デザイン)および教養・基礎科学系より各2名の委員、委員長1名、単位認定との関係から学務担当、就職との連携をはかるため就職指導担当が副委員長として参画している。事務局が3名、計25名で「生産実習委員会」が編成され、学部の特色科目としての生産実習の運営上

の課題や、成果向上のための企画・検討を行っている。

その結果、2005年度より学科共通の生産工学系科目の中にキャリア教育プログラムが設置され、2年次前期の「キャリアデザイン」、後期の「キャリアデザイン演習」によるキャリア意識の自覚と醸成、3年前期にはプレ・インターンシップとしての「プロジェクト演習」を経験させる。夏季休暇中に「生産実習」を実施し、後期には企業の管理職クラスを招聘して「生産工学特別講義」によってフォローアップを行い、就職活動とのリンクをはかりつつ、インターンシップが目的とする本質的な成果向上を目指す一貫したプログラムを実施している。

なお、私は2012年度から日本インターンシップ推進協会の会長を務め、全国25大学のインターンシップの支援を行っている。

建築工学科のインターンシップの流れ

藤本利昭 (2012年度生産実習委員会委員/生産工学部准教授)

昨年の生産実習では、194名の学生が夏休み期間中の10日間に、実践現場で学びました。

生産実習の履修方法

生産実習は、必修科目の「生産実習Ⅰ」と選択科目の「生産実習Ⅱ」があり、通年科目として設置されています。履修するには70単位以上を修得していることが条件です。

スケジュール

生産実習の年間の流れは表-1の通りです。生産実習は、企業実習に入る前の「事前学習」、建築生産現場で行う「企業実習」、企業実習後に行われる「事後教育」で構成されます。

事前学習では、企業実習にあつてのビジネスマナー講座や、実際に建設現場で働いているOBの方々を招いて行われる安全講習会などが含

まれます。

企業実習は生産現場における研修で、原則として夏季期間中に行うことになります。実習に際しては、受講生・受託企業・大学との間で信頼関係を築くために「覚書」「誓約書」の取り交わしています。生産実習の修得に際して必要な企業実習時間は、「生産実習Ⅰ」「Ⅱ」ともにそれぞれ70時間(10日間)以上の実習時間が必要です。

実習先は、官公庁、建設会社、設計事務所、ハウスメーカー、設備会社、建築系出版社など、多くの業種のご協力を得て、多岐にわたる職種について行われました。昨年は、例年に比べ建設現場での実習を希望する学生が多かったことが特徴でした。

生産実習の評価

事前研修(ガイダンス、講演会、

企業実習計画作成など)と企業実習を終えた後は、各自実習レポートと成果報告書を作成し、提出します。成果報告書の内容は実習先の指導者から事前に指導を受け、チェックを受けてから大学に提出します。

生産実習の評価は、実習先での実習態度、実習レポートと成果報告書の内容を考慮しながら大学の教員が総合的に評価します。

毎年秋には生産実習企業懇談会が行われ、昨年は建築工学科の代表として、3年生の内林優太君が「建設現場における実地研修」というタイトルで成果報告を行いました。

*

生産実習は学生たちにとって、社会を肌で感じ、将来の進路を具体的に考えるきっかけとなっています。実習を終えた学生たちの今後のさらなる飛躍を期待しています。

表-1 生産実習のスケジュール

時期	内容
4月	ガイダンス 生産実習の概要説明
5月	生産実習の履修手順とスケジュールに関するガイダンス
6月	企業実習先の決定 ・公募企業の情報公開 ・各担当教員による企業実習相談及び実習計画書のチェック ・ビジネススキル基礎講座 ・安全講習会
7月	ガイダンス ・実習先での諸注意に関する「覚書」「誓約書」等の説明
8~9月	夏季企業実習期間
9月末	実習レポート及び成果報告書の提出
10~12月	担当教員による企業実習講評会、企業等実習懇談会 ・懇談会(報告書の優秀作品をパネル展示) ・事後教育(建築の実務について)

右/学内で行われた生産実習発表会の様子。下左/受け入れ企業向けのインターンシップガイド。下右/学生に向けた履修の手引き



表-2 主な実習先と実習内容

実習先	実習内容
建設会社	大規模工事の現場事務所で施工管理者と一緒に現場管理実務の実際を学ぶ。
設計事務所	設計業務に関する資料収集・模型製作を手伝いながら設計実務のプロセスを学ぶ。
工務店	現場監督とともに現場廻りを行いながら、工事の着工から完成までのプロセスを学ぶ。
ハウスメーカー	住宅関連業務として、設計・積算・工事監理、生産システムの管理等を学ぶ。
行政機関	地方行政の現場において、産業界から人材ネットワークに至る基礎業務を学ぶ。
文化財保存の研究所等	文化財の修理現場で、解体・修復の記録を手伝いながら、実物に触れて文化財の様子を学ぶ。
NPO・業界団体等	街づくり、建設産業人材育成、海外技術移転、建設関連事務局において業務を手伝いながら業界の様子を学ぶ。

NIHON UNIVERSITY
日本大学 生産工学部
Career education 職業教育
Industrial practical training

人財育成『生産実習』
インターンシップが育てる未来の技術者

総合的・多岐にわたる実習先で、産業界から人材ネットワークに至る基礎業務を学ぶ。

「生産実習」を学ぶことで、将来の進路を具体的に考えるきっかけとなります。

生産実習Ⅰ・Ⅱ
履修の手引き

1. 生産実習について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.01-02
2. 履修の手続きとスケジュール・・・・・・・・・・・・・・・・P.03-04
3. 実習先での実習について・・・・・・・・・・・・・・・・P.05-06
4. 実習先での実習について・・・・・・・・・・・・・・・・P.07-11
5. 実習先での実習について・・・・・・・・・・・・・・・・P.12-13

日本大学生産工学部
生産実習委員会

受け入れ先の企業から

鹿島建設(株)

石田貴範/鹿島建設(株)東京建築支店調達部、1993年生産工学部卒業



上/インターンシップの現場での朝礼風景。下/インターンシップの実習現場

ものづくりの素晴らしさを知ってもらう

鹿島建設は建設業を中心に国内のみならずアジア、ヨーロッパ、米国などさまざまな国で建設プロジェクトを手がけている総合建設会社です。現場でのものづくりを通して、社会が要請する「新しい世代に継承すべき資産」を生み出してきました。弊社のインターンシップでは、生産工学部建築工学科の学生を対象に毎年5名ほど、建築施工現場での実習を10日間経験していただいております。実習から、大学の授業ではなかなか理解できない施工管理の業務内容への理解、施工管理に必要な要素、ものづくりの素晴らしさを知っていただくとともに、ゼネコンの現場監督に対する悪いイメージ(いわゆる3K)を払拭してもらいたい思いがあります。

生産工学部の場合

今後インターンシップを経験する学生に対するメッセージとしては、業種および企業選定の前に、事前にある程度の業界・企業を研究してもらいたいと思っています。興味のある分野の実習の方が、熱心に取り組めるはずです。また、単なる社会見学ではなく、就労経験として将来を見据えて実習に臨んでもらうことも大事です。そうすれば近い将来、学生から社会人になるイメージをもつことができると思います。

建設業の財産は「人」であり、弊社は人材育成に重きをおいています。インターンシップはこれからの時代を担う学生に建設業の楽しさ、厳しさを現場での実習を通して経験してもらいたいので、今後も積極的に協力していきたいと思っています。

学習の目的を明確にできる機会

近年、建築の業界では大規模になるほど意匠・構造・設備・工事など専門分野の分業化が進む傾向にあります。しかし建築は、自分の専門分野だけを知っていればそれですむということではなく、すべての分野について幅広い知識が必要になります。

インターンシップは、事前に実際の現場に触れることができる数少ないチャンスです。企業イメージや業界に触れることも目的のひとつですが、現在学んでいることがどんな場面で必要になってくるのか、なぜこのような学習しているのか、目的を明確にできる機会でもあるととらえています。そのため、自分が希望する進路に沿った企業だけではなく、逆に希望とは違う現場の体験ができる企業を選択してみることも価値があると考えます。

レスコハウスは、1966(昭和41)年設立のハウスメーカーで、プレキャスト製の壁式鉄筋コンクリート造の戸建・集合住宅の販売ならびに建築工事の設計、施工・管理、請負を行っています。したがって、営業、設計、工事まで建築に関わる一連の流れを体験できます。住宅としての一般的な内容を幅広く体験すること、一般的な木造住宅などとの違いについて体験できることを意識しています。

また、インターンシップの受け入れに際して、最初に何を目的にしているかを話す機会を設けるようにしています。これは、インターンシップに目的をもって臨んでいただきたいからです。学生のみなさんの将来のために、価値のある体験になれば幸いです。

レスコハウス(株)



上/住宅展示場に建つレスコハウスのモデルハウス。下/レスコハウスの建て方作業中の現場

実習した学生から

実習先/レスコハウス(株)
期間/10日間
実習内容/壁量計算・CAD操作・営業
実習生/建築工学科3年 田口美里



実習で見学したレスコハウスのモデルルーム

建設中の現場は刺激的

実習の前半は本社の業務のひとつであるプラン集の壁量計算を行いました。基本的にプラン集の図面を見ながら、耐力壁や窓、柱をデータとして入力していく作業です。この作業は耐力壁を増減させても偏心率は保たれるのかを確かめるものです。後半は部品図のリスト修正を行いました。この作業は、AutoCADを使って行いました。部品は会社独自の壁などで、リストの変更を行いました。その他に現場見学にも3カ所うかがいました。

1カ所目はハウジングギャラリー江戸川という展示場で、同行していただいた方に説明をうかがいました。2カ所目は建設途中の現場です。床下や壁の中の構造を直接見ることができました。3カ所目はハウジングプラザ横浜という展示場見学で、これから住宅を建てるお客さまとの

打ち合わせに同席させていただきました。

業務の中では、ExcelやCADなど学校でも使用するパソコンスキルも必要となるので、学生の間にもっと技術を身につけたいと思いました。現場見学では、ふだん見ることのできない建設中の現場はとても刺激になりましたし、学んだことは今後の大学の授業や就職してからも活かしていけると感じました。

短い時間でしたが、とても充実した時間を過ごすことができました。大学ではただひたすら授業を受けるだけなので、就職後それがどのように活用できるのかを知ることができました。また、今後大学生活ですべきことや、もっと身につけなければいけない技術があることがわかったので、残りの大学生活の課題として頑張っていきたいと思いました。

一つひとつが大事な作業

品質管理の仕事は、現場内外の掃除や鉄筋の配筋調査などがある。これらは、近所の住民への配慮や建造物の品質を保つための必要な作業である。工程管理の仕事では、現場の整理整頓を行った。これは、職人がスムーズに仕事をできるようにすることで工程の遅れをださないための大事な作業であることがわかった。

安全管理の仕事は、朝礼の時にラジオ体操や作業内容の確認などを行うことで、安全に対して意識を向上させたりすることができる。現場内清掃や整理整頓をすることでケガすることがなく作業ができることがわかった。これらの管理は、一つひとつが大事な作業である。また、それ

ぞれの作業がどの管理に対しても関係があり、重要な作業でもある。

夏場の作業はとてもきついものであったが、就職する前に有意義な経験ができたと思う。今回の生産実習では実際の作業の一部しか体験できなかったため、今後チャンスがあればもっといろいろなことをやってみてみたいと思った。

実習先/(株)アサヒ
期間/10日間
実習内容/品質管理・工程管理・安全管理

実習生/建築工学科3年 内林優太



実習先の型枠建て込み中の建設現場

大学院・他学部の場合

大学院工学研究科建築学専攻●実物大の建築を学べる機会

工学部でも、大学院インターンシップを制度開始と同時に導入し、意匠設計と構造設計をそれぞれ実施して、約20名の院生がこれを経験して巣立っている。私が担当している構造設計インターンシップでは、構造設計事務所耐震診断や耐震補強の業務補助を行い、担当した物件の判定・評価会への同席をさせていただいている。必要とされる時間数が180時間以上、期間は5週間程度必要であり、主に夏季休暇中の実施などの研究に対する制約も多いが、個人的には大学では得られない経験ができるし、実物大の建築を学べるいい機会だと思っている。

以下に在学生と卒業生の声をお届けする。最後に、多大なご協力をいただいている多くの設計事務所関係

者のみなさんに、この場を借りて御礼申し上げます。

江原修さん(現・千葉研究室M2)

「私は一昨年の夏季休暇にエーユーエム構造設計で実務体験を行いました。内容は被災度区分判定や郡山市立中学校校舎の耐震診断補助でした。多くの作業をPCで行い、結果も診断ソフトウェアにより求めましたが、全体像を把握した上で最終結果の正確さを判断することは、多くの経験を積んだ人でなければ難しいことがわかりました。

そこでは、自分の経験不足を痛感すると同時に、非常に責任ある仕事だと感じました。この経験は、学部4年間で経験したことよりも密度の濃いものとなりました」

板垣鉄哉さん(浅里研究室修了生/現・開発設計コンサルタント勤務)

インターンシップに行き感じたことは？

「時間を無駄にはいけないこと。社会人と学生では時間のとらえ方がまったく異なっていました。それからチームワークの大切さ。担当者全員がひとつの業務に取り組むための、コミュニケーション能力が大切であると感じました。人に見せるための資料作成については、グラフの線1本に対して、常に相手のことを考える必要があると学びました」

やっておけば良かったと思うことは？

「振動解析な動的な考え方をもっと真剣に勉強しておけば良かったと思います」

(浅里和茂/工学部建築学科主任)

大学院工学研究科建築学専攻●どこまで関わるか大きな課題

建築学専攻では、夏季休暇、春季休暇を利用する学外のインターンシップI、II、III、IV、Vの他、学内のインターンシップ2科目と関連する演習、実習5科目、講義13科目が登録されている。これらの科目を履修することで意匠設計、構造設計、設備設計の各専門領域で一級建築士受験資格要件に対応する1年、または2年の実務経験年数を得ることが可能である。実施時間は連続または分割して4週間(実時間135時間)以上で単位は4単位としている。

過去4年間における合格者は次のとおりである。2009年度は「インターンシップI」が8名、「II」が2名、10年度は「I」が3名、「II」が5名、「III」が1名。11年度は「I」が7名。そ

して12年度は「I」のみで11名となっている。

受け入れ先は大手ゼネコンや大手設計事務所から中小の設計事務所および構造設計事務所、インテリア会社などさまざまであり、基本的には指導教員の紹介によって受け入れを打診していただいている。

大手企業などでは、受け入れ態勢も整っており、インターンシップの学生用の課題も用意され、教育プログラムとしても整備されている場合が多い。結果的に、業種としては構造系の業務を担う会社が多く、大手ゼネコンの構造設計、構造設計事務所、大手設計事務所の構造担当部署などが多数を占めている。実務経験として構造計算などの業務は比較的

行いやすいが、設計部門となると、実際の業務の中の何を担当させるかは難しい。アルバイト同様の模型制作のレベルを越えて、どこまで設計そのものの作業に関わらせることができるのか、大きな課題となっているからである。

毎年、年度末の1月にインターンシップ報告会を開催して、教室主任、大学院クラス担任、指導担当教授などによる合否判定を行っている。学内では体験することのできない学生たちの貴重な体験談を聞くたびに、受け入れ先と指導担当者の方々の真摯な対応に頭が下がる思いを実感させられている。(大川三雄/理工学研究科建築学専攻大学院クラス担任)

大学院理工学研究科海洋建築工学専攻●海外の設計事務所でアイデア採用

当専攻のインターンシップは、「海洋建築工学インターンシップI」(学内)と「II」(学外)に分けられている。「I」と「II」を含めて受講する学生は極めて限られており、構造系では中西・北嶋研究室、浜原研究室、計画系では佐藤(信)研究室の学生のみであった。学外の実習先は、意匠系設計事務所として竹中工務店設計部、三菱地所設計、東電設計、日南鉄構、UAA北京などとなっている。

ここでは、「インターンシップII」(学外)について、昨年度の当研究室の実例について大学院生より聞き取りした内容を紹介する。

昨年度は2名の大学院生が中国の設計事務所UAA北京にて約1カ月(2011年8月1日～9月3日、途中建築学会大会発表のための一時帰国あり)の実習を行った。UAA北京は約20名の規模の設計事務所、日本人の一級建築士スタッフも1名常

駐している。

主宰者は50歳前後の方であるが、その他は大学卒業すぐから30歳くらいまでのスタッフが多く平均年齢は28歳くらいと若い。大学院生に与えられた実習課題はかなりハードであり、約1カ月で北京の一街区(海淀区の約30万㎡の街区)の都市をまるごと設計することが求められた。ちょうど日本の高度経済成長期のような高揚感が事務所には満ちていたが、毎日の仕事は9～18時が基本であり、残業するスタッフがほとんどいないなどの割り切り方はお国柄だろうか。

計画にあたっては現地での一般的な仕事の進め方と日本的な考え方、解釈について議論が繰り返され、大学院生でもよい提案があると採用されるなど柔軟な姿勢で進められていった。このため実施設計では、大学院生のアイデアが採用されて作業



計画の進行を説明するレビューの場面

が進んでいるとのことである。

また、週に1回ほど、生態学者や経済学者など他分野よりの講師を招いて勉強会が開かれ、常に向上しようとする姿勢が印象的であった。使用する言語は、英語、北京語、日本語が入り交じる中、共通語としてはやはりスケッチや図面がなによりも重要視されたとのことである。

こうした国際交流とインターンシップが融合した機会は貴重な体験であるため、これからは安全面に配慮しながら可能性を追求していきたいと考えている。(佐藤信治/理工学部海洋建築工学科専任講師)

短期大学部建築・生活デザイン学科●建築を学ぶ大きな糧に

本学科のインターンシップ科目は、「居住プラン及び実習(2001～02年・2単位)」「デザイン・生産実習(2003～07年・2単位)」「建築ものづくりワークショップII(2008～11年・2単位)」「ものづくりインターンシップ(2012年～・1単位)」と、授業名称や単位数は移り変わりつつも持続的に、夏季休暇期間中に実施し、開講以来10年余りの実績を重ねてきた。

当初は2年生向けだったが、2008年度からは1年生へも門戸を広げた。実務の現場での実習の体験を通じて、学内の授業では得がたい実践的な技術や方法を目の当たりにしながら学ぶとともに、社会的適応能力やコミュニケーション能力を育むこと、その上で専門領域への関心をよ

り高めることを目標に据えてきた。

しかし受講者が大学1、2年生という性格上、基本的に建築に対する関心の強さや、実務に関わるトレーニングの量は、まだ十分なものとはいえない。

そこで、4月から始まるガイダンスのプロセスにひと工夫加えた。インターンシップの意義を説いた上で、各自が研修先企業について調べ、選び、希望する企業とコンタクトをとり、面接を経て受入許可を得るという流れをたどることで、学生の熱意を高めつつ、マナーの向上もはかっている。だが一方で、受入側企業にはご面倒・ご苦労をかけてきたこととも思われる。それでも例年、設計事務所を中心に20社程度の企

業に研修先候補となっていただき、意欲に満ちた学生が受講する舞台となってきた。

こうした経緯もあってか、受講者はその後、学習意欲が向上していく場合が多い。また、インターンシップ終了後も折をみてアルバイトなどで研修先企業とのつながりを継続させる学生も少なくなく、中には編入学を経て4年制大学卒業後に就職したケースもみられる。

以上、建築・生活デザイン学科での取り組みは、ささやかなものではあるが、受講した学生にとっては建築を学ぶ大きな糧となっており、少なからぬ成果を上げていると思われる。(矢代真己/短期大学部建築・生活デザイン学科准教授)

トピックス◎ 第4回日本大学桜門建築会学生設計コンペティション結果報告

テーマ/ 100km²、100m²

日本大学各学部、大学院の在学学生を対象とする設計競技「第4回日本大学桜門建築会学生設計コンペティション」の第2次公開審査が、1月12日に開催された。今回は世界的に注目を浴びている若手建築家の石上純也氏を審査員に迎えた。

謎解きテーマの出題

今回のコンペでは前回までの方法を改め、昨年10月20日に石上氏がテーマの説明を兼ねたレクチャーを行った。この公開レクチャーには多くの学生が駆けつけ、熱気に包まれた会場の中で、石上氏は淡々と、しかし淀みなく正確なことばを使いながら、自らの10のプロジェクトを披露した。そのレクチャーの最後に発表された今回のテーマが、謎解きのような「100km²、100m²」というものだった。もう少し理解を深め

るために、続いて提示された3つの条件を紹介する。

条件1/敷地面積=100,000,000m² 建築面積=100m²
 条件2/敷地の環境、形状、周辺の環境、建築の延床面積、プログラムを設定すること
 条件3/建築と敷地が強く関係すること

この条件を見ると、ここで提示される提案は、ある種のリアリティをもつ必要があることは明らかである。呆気にとられた学生たちの前で、石上氏は「今の僕の話聞いていれば、ここで求められていることはわかるはず」と答えるのみだった。まさに2時間を超える自作のレクチャーがあったからこそ、それ以上の説明を要さない、桜建会コンペならではの独創的なテーマが出題された。

第1次審査への挑戦

石上氏からの挑戦状とも呼べるテーマに対し、さすがに応募する学生も戸惑ってしまったのか、残念ながら、これまでの中でもっとも作品数の少ない17点の応募しか集まらなかった。本来であれば10作品を選出して第2次審査を行うはずが、応募者が少なかったこともあり、石上氏の申し出により、応募者全員が発表することとなった。

審査の結果、該当するレベルに達した作品がなかったという石上氏の判断により、最優秀賞は選ばれず、優秀賞4点、佳作3点が選ばれた。作品の内容については、ここに掲載されたプレゼンテーションを見てもらいたいが、表彰式の際に話された石上氏の総評が、今回のコンペのことをもっとも正確に説明しているように思う。それを最後に掲載する。

末尾ながら、挑戦的なテーマを出すとともに、真摯に審査していただいた石上純也氏に心より感謝の意を表したい。

石上氏の総評

「課題の意図がなかなか理解されていなかったと思い、もう少し課題の説明をすべきだったとも感じています。課題の意図は、僕が最近考えていることでもあるし、必要と感じていることでもあります。建築をつくる時に、どうしても敷地だけでなく、もう少し広い範囲を考えていくと、なかなか社会的に説明がつかないし、建築的な意図としてもとらえづらい。建築の敷地は、たいていのプロジェクトの場合、特に都市部では建築のスケール感と大きな乖離はありません。どれだけ説明しようとしても、建築に対する周辺の環境の説明は概念的であったり、哲学的であったり、そういうところに陥りがちだと常々思っています。

そうであれば、コンペなのだし、説明できる範囲を超えた大きな敷地の中で、その環境に対する建築の影響やとらえ方を、具体的な建築的な提案をもって説明できる作品が出てくることを期待しました。

これはカラクリ的なことでもあり

ますが、100km²の敷地に100m²の建築面積の建築を描こうとすると、どうしても平面図と配置図を同時に表現できなくなります。

紙面は限られているので、僕の予想では、平面図を描くか、配置図を描くかどちらかになるだろうと思っていました。その時に100km²という大きな敷地と100m²という小さな建築面積の建築的な説明を、2つのスケールを横断しながらどのようにプレゼンテーションしてくれるのか、というところを期待していたのです。しかし、今回提出された作品の中には、そこまで至っている人はいなかったんです。

やはり100km²という敷地で建築を考えるからには、それなりのスケール感をもって、その敷地の大きさに対してどのように配置するのかを、説得力をもって説明してほしい。正方形に仕切った敷地としてとらえている人が多く、そこはどちらかという漠然としていて、はっきりと全体をとらえていないという印象をもちました。

今回、少ない人数の中で、作品をどのように評価しようかと考え、ひとつの基準をつくりました。それは、大きく分けて建築になりそうな作品に佳作以上として、建築に至ってい

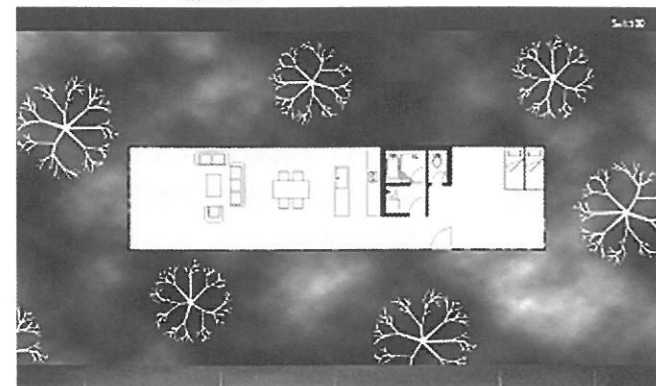


審査の後にあいさつをする石上氏。

ない作品には賞を与えない、というような割り振りです。佳作レベルの人たちは、建築にはなりそうですが、まだ自分たちの案の良さをあまりわかっていないので、もう少し努力が必要だと思います。優秀賞の人たちも同じようなレベルですが、スケール感をもって提案しているところを評価しています。

実際には、大きなレベルの差はないと思っていて、僕が意図した、期待していた提案は見られませんでした。これから建築をやっていく上で、もう少し深いレベルでものごとを考えて提案をできるようになってくれることを期待しています。みなさんにとって、今回時間を使って考えたことが、良い経験になったと思います。この経験を活かして、がんばってください」(佐藤慎也/日本大学桜門建築会学生設計コンペティション実行委員会委員)

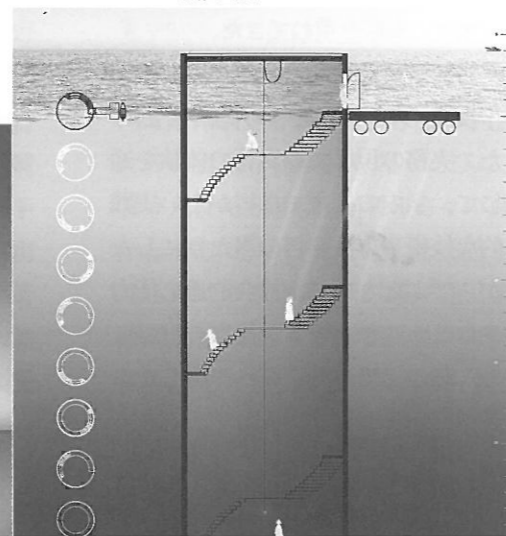
優秀賞 「MELT 死にゆく自然の中で生きる建築」 新城雄史



優秀賞 「100km²と呼吸する建築」 落合俊行



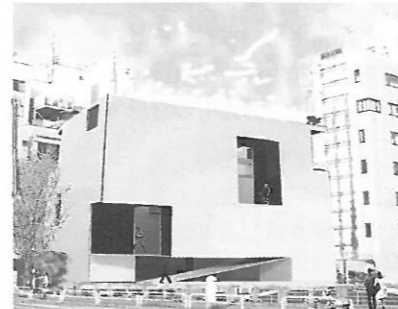
優秀賞 「光をとらえる筒」 富樫由美



優秀賞 「砂漠の塔楼 身体・建築・風景のスケール感」 三浦洵



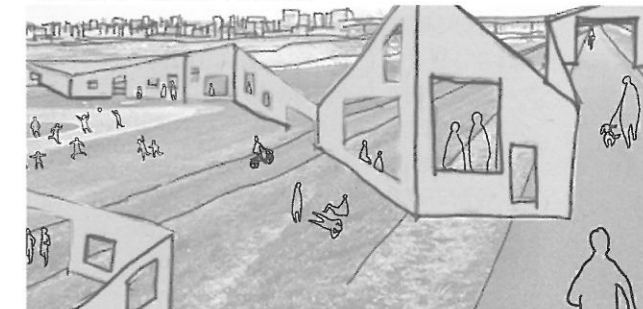
佳作 「都市回帰領域」 小島弘旭



佳作 「バス停百ものがたり」 遠藤一成、川島慶之



佳作 「川と日常の風景 いつも見る自分が知る風景」 飯名悠生、緒方彩乃



審査結果表

最優秀賞/なし

優秀賞/新城雄史(工M1)、富樫由美(理工建築4年)、三浦洵(工M2)、落合俊行(理工建築4年)

佳作/小島弘旭(理工建築3年)、遠藤一成・川島慶之(工3年)、飯名悠生・緒方彩乃(理工建築3年)

応募総数17点内訳/理工建築11点、工5点、生産工1点

*優秀賞作品の4点は表紙にも写真を掲載しました。

研究室紹介

研究テーマ **建築基礎構造と地盤環境** 安全で合理的な建築基礎の設計・施工方法の開発と土・水の問題に取り組む

研究室名 地盤・基礎構造研究室(佐藤(秀)研究室)
教員名 准教授・佐藤秀人
キーワード 地盤工学/基礎構造/杭/擁壁/地盤アンカー/土壌汚染/水環境汚染
企業等への要望 共同・受託研究の要請 計画・設計等の協力 研究成果の事業化等 その他

研究概要

本研究室が対象としている研究領域は、地盤基礎工学および環境工学です。国土が狭く地震が多い日本では、基礎構造物もこれらに対応したものが要求されます。本研究室では、耐震性が向上し施工時の発生残土も少ない「背面梁付擁壁」に関する研究、施工が比較的容易で支持力向上も期待される「回転貫入杭」に関する研究、根切り山留め工事や耐震補強に用いられる「地盤アンカー」に関する研究、地震時の杭の挙動を解明する「杭基礎の水平支持力」に関する研究などを通じて、安全で合理的な基礎構造の設計・施工方法に関して研究しています。

また、近年では快適でより安全な居住環境を確保するために、地盤の環境問題への関心も高まっています。本研究室では、「土壌・地下水汚染」に関する研究、「プラスチック由来の化学物質による沿岸・海洋環境汚染」に関する研究を行い、汚染の実態解明とそれらの除去・削減方法についての研究にも取り組んでいます。



背面梁付擁壁の施工事例

連絡先◎短期大学部建築・生活デザイン学科 船橋校舎9号館2階 TEL 047-469-5433 E-mail・佐藤秀人 sato.hideto@nihon-u.ac.jp

トピックス

「笠井芳夫先生・毛見虎雄先生を偲ぶ会」の報告

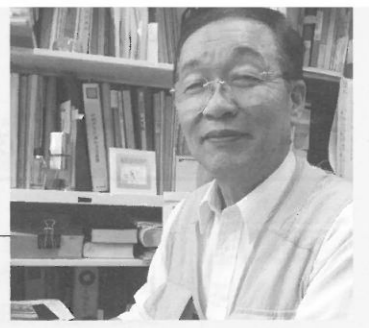
昨年11月23日、東京千代田区アルカディア市ヶ谷で、「笠井芳夫先生・毛見虎雄先生を偲ぶ会」が開催され、両先生に生前親交の深い大学関係者や研究者、約100名が集った。日本大学名誉教授の笠井先生は一昨年10月、元足利工業大学教授の毛見先生は同年8月に急逝されたが、ともに日大理工学部の同級生で、建築材料、施工学の中で切磋琢磨してきた仲であった。冒頭に生産工学部長の松井勇先生があいさつし、続いて、白山和久筑波大学名誉教授、上村克郎元宇都宮大学教授、長瀬重義東京工業大学名誉教授、友澤史紀東京大学名誉教授らが、両先生との思い出を懐かしく話された。

笠井先生の研究室の後を継ぐ生産工学部建築工学科教授の湯浅昇先生は「笠井先生は、コンクリート、建築材料に関する多くのテーマの第一人者だった。豊かな情報収集、深い洞察力、猛烈な研究推進力、そして他の研究者に対する尊敬と尊重、人間としての優しさがもたらしたもの。毛見先生は、笠井先生の大切なパートナーであり、おふたりの関係が日大のこの分野の研究に厚みと強さを生んだ」と話した。両先生の薫陶を受けた理工学部建築工学科教授の中田善久先生は「私はよく笠井先生に怒られ、それをなだめるように励ましてくれたのが毛見先生。材料施工の重鎮の先生から、直接指導が受けられて、とても幸福な研究生活だった」と振り返り、ともに、両先生のことを継いでいくとの決意を表明。両先生のご遺族が謝辞を述べて閉会した。



両先生のご遺族の方を囲んで、偲ぶ会に集まった人たちと記念写真を撮る

片桐正夫先生を悼む



忘れられた技術の復活と人材の育成 平山善吉(日本大学名誉教授)

片桐先生が入院されたと聞いたのは、私も風邪をこじらせ病院へ通っていた時だった。気にかかっていた矢先、今度は退院されたという情報が入った。「良かった」と思っていたところ、2日も経たないうちにご逝去の報に接し、その驚きと深い悲しみは、ことばで表すことはできないものだった。

葬儀がすんで数日の後、奥さまからことの詳細を聴き、その時は納得したもの、何かの間違いであればという思いがぬぐいきれなかった。

私が先生と仕事をするようになったのは、1989年度からである。当時の会長は伊藤喜三郎先生で、私は理事を務め、先生には総務委員会委員長をお願いした。伊藤先生は会の結束と活性化に腐心され、片桐先生はこれに応える多くの事業を手がけられた。以来、理事、副会長、会長を歴任され、22年の長きにわたって、桜建会発展に尽くされたのである。

片桐先生が総務委員長として最初に手がけられたのは会長任期である。「任期2年、2期限りとし、学内(大学教員)と学外(教員以外の卒業生)で、交互に

選ぶ」もので、これが今日に至っている。

2008年には会長に推され、会の活性化とともに、健全な財政の確立と諸規則、諸規定、委員会等を整備され、正に桜建会の骨格をつくられたのである。

先生は、1980年以降、上智大学の石澤良昭先生が主宰する「カンボジア遺跡国際調査団」の建築部門で活躍されていた。私は、桜建会の仕事をしようになってから、片桐先生に誘われて初めてカンボジアの土を踏んだのである。この世のものとは思えない壮大で素晴らしい遺跡に接した時、私はその虜となり、毎年のように遺跡通いをした。先生も専門の立場からカンボジア通いを続け、この遺跡の調査・研究に従事されたのである。先生の哲学はカンボジア人の忘れられた技術の復活と人材の育成にあったのである。

先生は文化財の保護はもちろんのこと、カンボジアの人たちの教育に尽くされ、その理念は彼らの自立を促すものであった。遺跡の修復では「カンボジア人によるカンボジアのための、カンボジアの遺跡の保存修復」を実践されたのである。

先生のカンボジアにおける最大の功績は、アンコール遺跡を代表するアンコール・ワット西参道の修復といってもよいのではなからうか。12世紀前半に建設された石の参道で、酷く傷んでおり、北側半分を日本が修復した。これこそ片桐先生が総てをかけてなされた偉業である。先生の修復における理念は、「往時の技術と材料でなおす」というもので、1996年に着手し、10年の歳月をかけて完成させたのである。この業績により、2007年にカンボジア王国文化功労章を授与されている。

この間先生は、専門の建築史の研究者の立場から各地の文化財審議会、あるいは景観審議会委員などを務められ、1997年には東京都文化功労者表彰を受けるなど、わが国とカンボジア王国における文化財の保護にも活躍された。あまりにも早いご逝去は、かえすがえすも残念であり、ここに心より先生のご冥福をお祈り致します。先生安らかにお眠りください。合掌

大学の枠、日本の枠を超えて 重枝豊(理工学部建築工学科教授)

昨年11月初旬ころ片桐先生に研究室前で会い、「しばらく大学に来られないから、2週間後に打ち合わせしよう」といわれた。ミャンマー旅行の後だったので、少しゆっくりしたいのだろうと気にはかけなかった。それが先生と交わした最後の会話になるとは夢にも思わなかった。

学部3年生の時に会いしてから、関西研修旅行、インドネシア、中国などへの学会研修旅行、ヨーロッパ研修、韓国、カンボジア、ベトナム、ミャンマーなどの海外調査、世田谷区、大田区、板橋区調査など現場を通してさまざまなことを学ばせてもらった。自分で築きあげたと思っていた「自分の目で確認する」という建築に対する態度は、片桐先生が教えてくれたということを感じながら感じている。

先生の研究は、修士論文の戒壇院研究から派生した朝鮮半島・中国建築の研究がひとつの柱だった。その成果は博士論文『朝鮮木造建築の架構技術発展と様式成立に関する史的的研究』に結実した。私が修士1年の時にふたりで

韓国の古建築を廻り、韓国建築を研究しないかといわれたが、即座にお断りしたことを今は悔いている。

2番目の柱は、稲葉和也先生(元東海大学)や一色史彦先生(元都立大学・当時)、故宮上茂隆先生(東京大学)との活動にあった。大学の枠を超えた文化財に対する実践的な活動は、世田谷区の岡本民家園、次太夫堀公園民家園などに結実している。その過程では「文化財とは何か」という本質的な問いに常にフィードバックしながら、生じた課題を一つひとつ解決していった。学会民家小委員会の活動や、世田谷区・大田区などの文化財専門委員の活動、また、草野和夫先生を代表とする『日本民家語彙集解』(共著・建築学会賞受賞)にも一貫した態度で臨まれていた。

3番目は、カンボジアのアンコール遺跡関係の仕事である。この3本の柱に共通するのは、それぞれの研究が個人的に成果を得るためだけではなく、各地の後進を育てることに向けられたことだろう。例えば、韓国からの留学生7人の修士の指導であり、中でもアン

コール期の建築技術史で博士号をとった崔炳夏さんは、母国の文化財審議会委員などの要職に着いている。文化(文化財)はモノとしての価値だけではなく、それらを支える人の育成と両立させることを実践し続けた。韓国桜建会が結成されたのも、先生の母校への想いが結実したことを示している。カンボジアに行けば遺跡周辺の子どもたちに日本の文房具やキャンディを配り続けた。何かしら使命感のようにも感じられたが、子どもの母親から「虫歯になって困る」という苦情がくるまで続けられた。

10年後、20年後を考えながら進んでこられた先生が、弟子たちに何のことばもなく急逝されたのは残念でならない。恒例の関西研修旅行の季節になって、35年間も熱弁をふるってこられた先生の姿が今でも脳裏をよぎる。

片桐先生、国内外の不肖の弟子たちは力を合わせて、先生の熱い想いを継承していきたいと思っています。天国では、好きだった温泉(鳥の行水だったけれど)にゆっくりつかって、今度こそお体を労わってください。

齋藤賞・加藤賞・桜建賞 平成24年度受賞者一覧*受賞作品の紹介は次号に掲載いたします

齋藤賞

- 松本良太 (理工学研究科建築/修士論文)
「HP曲面を有する張力膜構造の風応答性状に関する研究-レイノルズ数が膜面に及ぼす影響について-」
指導/教授・岡田章
- 銭葉ベイ (理工学研究科建築/修士論文)
「甘粛省南ユグル族自治州における居住環境の実態とバイオヴェリッジ構想-中国西部地域における気候と健康に配慮した新型省エネルギー住宅に関する研究-」 指導/教授・井上勝夫、短大教授・吉野泰子
- 加藤優輝 (生産工学研究科建築工/修士論文)
「空気膜ドームの作用風圧と構造強度に必要な内圧制御に関する研究」 指導/教授・丸田榮蔵
- 大平旭洋 (工学研究科建築/修士論文)
「RC構造物におけるネットワーク及び補修剤を用いた自己修復コンクリートの開発」 指導/准教授・サンジェイ・パリーク

加藤賞

- 大河原靖徳 (理工学研究科海洋建築工/修士論文)
「沿岸域の建築物に作用する津波荷重特性に関する研究」 指導/教授・増田光一、准教授・居駒知樹
- 大森光 (理工学研究科海洋建築工/修士論文)
「OWC型波エネルギー変換装置のプロジェクトングウォール効果に関する研究」 指導/教授・増田光一、准教授・居駒知樹
- 寺口敬秀 (理工学研究科海洋建築工/修士論文)
「水中文化財を対象としたダイビング環境整備に関する研究」 指導/教授・櫻井慎一

桜建賞

- 丸山明恵、齋藤成二、津波古翔太 (理工学部建築/卒業論文)
「騒音分野における紛争の判例分析と司法判断に対する検討」 指導/教授・井上勝夫
- 田中俊介、高野晋光 (理工学部建築/卒業論文)
「天井下地材をTMDとして用いた新しい吊り天井システムの開発」 指導/助教・秦一平
- 竹内梓 (理工学部建築/卒業論文)
「木造面格子壁の構造特性に関する研究 -格子間隔が剛性と耐力に及ぼす影響について-」
指導/教授・岡田章
- 大庭矩文 (理工学部建築/卒業論文)
「江戸時代の教育空間に関する研究 -東日本の七つの藩校を中心として-」 指導/助教・山中新太郎
- 田中雄一郎 (理工学部建築/卒業論文)
「和光市越後山地区における「地域活動」を促す住宅地づくりに関する研究」 指導/准教授・川島和彦
- 沢田拓郎 (理工学部建築/卒業設計)
「Tokyo Public」 指導/教授・今村雅樹
- 杉田翼、曾根孝亮、山下和浩 (理工学部海洋建築工/卒業論文)
「マイクロバブルと微生物活性剤を用いた堆積汚泥の浄化実験」 指導/専任講師・岡本強一

- 涌井匠 (理工学部海洋建築工/卒業論文)
「浸都の改築 -海拔ゼロメートル地帯における街区更改計画-」 指導/専任講師・佐藤信治
- 江連唯 (理工学部海洋建築工/卒業論文)
「柱・梁曲げ終局強度比がRC造柱梁接合部の終局強度に及ぼす影響に関する解析的研究」
指導/教授・浜原正行
- 荒牧龍馬、瀧脇悠太郎、六田莉那子 (生産工学部/卒業論文)
「繊維補強コンクリートを用いた鉄骨コンクリート部材の構造性能に関する研究 -せん断性状の検討-」
指導/准教授・藤本利昭
- 鈴木彩侑理、高橋瞳 (生産工学部/卒業論文)
「松川ボックス第1期のトップライトによる「団欒の場所」の明るさ感に関する研究」
指導/専任講師・亀井靖子
- 鈴木佳奈、山口直人 (生産工学部/卒業論文)
「シーリング材の劣化評価方法に関する研究 -促進試験初期結果について-」 指導/教授・松井勇、准教授・永井香織
- 藤枝拓弥 (生産工学部/卒業設計)
「木造乾燥の世界で」 指導/准教授・岩田伸一郎
- 橋聡子 (生産工学部/卒業設計)
「つむぐ -まちと大学のあいだに-」 指導/教授・渡辺康
- 阿部慎也 (工学部/卒業設計)
「近い建築 -ニュータウンの様相-」 指導/准教授・浦部智義
- 藍澤友詩、石橋和晃、石山寛仁、今村翔太、小野栄憲、片平めぐみ、黒木康平、佐藤妙子、宮内春樹 (工学部/卒業論文)
「日本大学工学部図書館における耐震補強効果の検討」 指導/教授・千葉正裕、助教・日比野巧
- 手塚伸明、高野圭奈 (工学部/卒業論文)
「新規な粉末防せい剤を利用したRC構造物用補修材料の防せい性」 指導/教授・出村克宣、助教・齋藤俊克
- 鎌田俊太郎、宇野拓也、倉林謙、植原壮人、長太遥平 (工学部/卒業論文)
「福島県の歴史的建築インベントリ再構築に関する調査研究」 指導/准教授・速水清孝
- 大矢康隆、中谷哲郎 (工学部/卒業論文)
「公園内における移動イス設置方法に関する研究」 指導/准教授・土方吉雄
- 伊東拓也 (短期大学部/ゼミナール制作・設計)
「CLOUD-雲物理学研究・芸術センター」 指導/准教授・田所辰之助
- 浅川景太 (短期大学部/ゼミナール制作・研究)
「半球状骨組膜構造を型枠としたアイスドームの制作に関する実験的研究」 指導/教授・黒木二三夫

事務局だより

平成 25 年度の 桜門建築会総会のご案内

来たる 5 月 29 日(水)に平成 25 年度の桜門建築会総会を、東京ガーデンパレスにて開催いたします。会員の皆さまは、どなたでもご出席できますので、どうぞふるって参加ください。

なにか不明な点がございましたら、HP をご覧いただくか、下記事務局までお問い合わせください。



会場案内図/JR 御茶ノ水駅、地下鉄丸ノ内線お茶の水駅、地下鉄千代田線新御茶ノ水駅より、徒歩 5 分程度

「NU アート倶楽部」 (略称 NAC) 設立のお知らせ

本会の活性化と会員相互の親睦をはかるため、「NU アート倶楽部」を設立することになりました。

新年 1 月 10 日に第 1 回幹事会(発起人 15 名)を開催し、会則と活動

スケジュールを話し合いました。会則、役員等は設立総会で正式に決定されます。

アート展の開催(年 1 回、理工学部駿河台キャンパス 1 号館を予定)、スケッチ旅行など、楽しい企画をいっぱい立てています。年代や分野を超えた交流の場にしましょう。なお、5 月 10 日(金) 18 時よ

り、NAC 設立総会を予定しています。ご興味がありましたら、会則案および入会申込書を用意していますので、下記事務局までご連絡ください。みなさまのご参加をお待ちしています。

NAC 事務局/日本大学理工学部 今村雅樹研究室 TEL・FAX/03-3259-0706 mail imamura@arch.cst.nihon-u.ac.jp

新入特別維持会員のご紹介

新規入会者 氏名/卒業年/勤務 (平成24年11月14日~平成25年2月13日) 6名

片桐 靖夫	理工建-63 (株)三菱地所設計	平野 直樹	工-61	北海道職業能力開発大学校
梅澤 恭太	理工建-H8 (株)NTT ファシリティーズ	渡辺 健	生産工-59	(株)渡辺健建築設計事務所
佐藤 純也	生産工-H6 (株)NTT ファシリティーズ	堀田 渡	理工建-59	(株)NTT ファシリティーズ

日大建築系学科 卒業の親子募集

日本大学は、建築系学科を創設して 90 有余年を刻む歴史があります。広報委員会では、桜建会報の記事として、「日大 世代を超えて」という特集テーマを企画しており、親子で日大建築系学科を卒業した方々に日大今昔のお話をうかがいたいと思っています。ご協力いただける方は下記事務局までお知らせください。ご応募を心よりお待ちしております。

桜建会報 NO.96 2013-March
発行人 岩井光男
編集 桜門建築会広報委員会
〒101-8308 千代田区神田駿河台1-8-14
日本大学理工学部内

広報委員会
委員長 佐藤慎也(理工学部建築学科)
副委員長 塩川博義(生産工学部建築工学科)
大川三雄(理工学部建築学科)
委員 山本和清(理工学部海洋建築工学科)
亀井靖子(生産工学部建築工学科)
プンタラ・S・ガン(工学部建築学科)
矢代眞己(短期大学部建築・生活デザイン学科)
大西正紀(mosaki)
西山麻夕美(フリー編集者)

桜建会事務局
住所・所属の変更、クラス会の開催、投稿、会費、名簿など桜建会全般についてお気軽にご連絡、お問い合わせください。
理工学部5号館7階574A号室
TEL03-3259-0649 FAX03-3292-3216
E-mail kaiin@okenkai.jp
ホームページ http://www.okenkai.jp/
専任/星野麻衣子
非常勤/櫻井佐和、大木明子
業務時間/AM10:00~PM5:00(月~金)

学部ニュース

工 トピックス

◎サンジェイ・パリーク准教授と熊田慶樹君(パリーク研・平成23年度院卒)、大平旭洋君(パリーク研 M2)は、東北大学西脇智哉准教授とともに、「連結材ユニットを用いた自己修復コンクリートの RC 構造物への適用に関する実験的検討」と題した論文を発表し、5 月 8 日に日本コンクリート学会(JCI)東北支部より論文賞を受賞した。

◎卒業生の春日太郎君(速水研・平成23年度院卒)の「中世禅宗様における中国様式の変容-尾垂木の力学特性を中心に-」と、早川真介君(浦部研の研究生)の「木造仮設住宅の計画特性に関する研究-東日本大震災後の福島県内の仮設住宅を対象とした考察-」が、日本建築学会より平成 24 年度優秀修士論文賞を受賞し、9 月 12 日の日本建築学会大会で表彰された。

◎浦部智義准教授と浦部研究室を含む福島県内 2 次公募分ログ仮設住宅建設チームが計画・設計・建設を行った「木造仮設住宅」が、2012 年グッドデザイ

ン賞金賞[経済産業大臣賞]を受賞。
◎10 月 19 日、せんだいメディアテークで開催された日本建築家協会(JIA)主催第 15 回東北建築学生賞で、13 校 14 学科応募総数 34 作品中、中井奨太君(浦部研 4 年)の作品「水と暮らす-つかずはなれず-」が奨励賞東北専門新聞連盟賞を受賞した。

◎阿部慎也君と佐藤雄太君(浦部研 4 年)は、第 4 回ハーフェレ学生デザインコンペティション 2012(課題「1 個人または 1 家族が使用する避難シェルターをデザインする」)において作品名「応急箱~受け継がれていく思想~」が優秀賞に選定され、11 月 27 日、ドイツ文化会館 OAG ホールで開催された授賞式で表彰された。

◎濱田幸雄教授と浦部准教授は昨年 10 月 25 日に行った、福島県、大学、国の研究機関により発足した「福島県緊急仮設住宅等の生活環境改善のための研究会」(委員長/鈴木浩福島大学名誉教授)に参加した。

短 大 トピックス

◎星和磨助手は、共著書『はじめての音響数値シミュレーション プログラミングガイド』をコロナ社から出版した。音響数値計算のための数値シミュレーションの手法(有限要素法、境界要素法、時間領域有限差分法、音線法、CIP 法)について、数値計算に不慣れでも概要がつかめるように、特徴、基礎理論と定式化、コーディングについて丁寧に説明したもの。全手法のプログラムを掲載し、音響数値解析分野では希有な一冊となっている。

理 工 海洋建築工学科トピックス

◎川西利昌教授は、技報堂出版から『紫外線・熱中症を防ぐ日除け』を出版した。永年の研究成果を、一般の人びともわかるように書き下したもので、内容は日除けの歴史、世界や日本の日除け、日除け計画と設計、などから成り立っている。毎夏繰り返される日焼けや熱中症を、建築的視点から防ぐ方法が記されている。

理 工 建築学科トピックス

◎久保貴子さん(羽入・星研 4 年)が、「ART MEETS ARCHITECTURE POSTER COMPETITION 2012」(主催/(株)アーバネットコーポレーション)で、入選となった。立体アートコンペの告知ポスターへの提案が求められたもので、336 点の応募案から選ばれた。



久保貴子さんの応募作品

◎空間構造デザイン研究室(岡田章教授、宮里直也助教)が、「第 29 回全国都市緑化フェア TOKYO」の協力に対し、東京都より感謝状を授与された。同研究室は本フェアの 2 会場に、学生のセルフビルドによる仮設のイベントスペースを設置。日比谷公園には情報スペースとなるアルミと膜による多面体のドームを、浜離宮恩賜庭園には休憩スペースとなる張力膜のテントを設置した。

上/日比谷公園の多面体ドーム
下/浜離宮恩賜庭園の張力膜テント



◎1月24日に行われた生産工学部長選挙で、松井勇教授(建築材料学)が再選された。

◎2月15日、生産工学部と中国科学技術大学(台湾)との提携行事として建築工学科卒業設計審査会が行われた。この日、同大学の孫啓榕先生(建築系)と顔敏傑先生(インテリア系)をゲスト審査員として招聘して中国科技大学特別賞を選出した。その結果、箕嶋小百合さんの「巣まい。路上生活

者とすみだ」が受賞した。

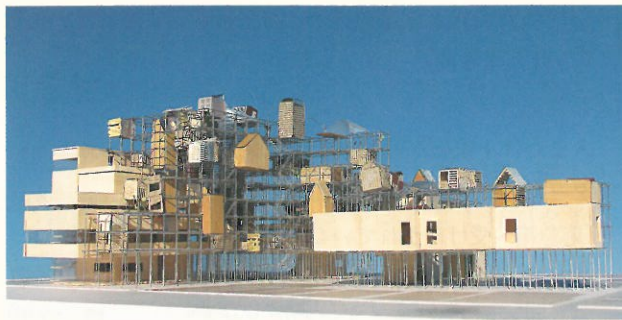
◎生産工学部建築工学科の教育が、アクティブ・ラーニングの先進的方法として「第2回 河合塾主催FDセミナー2012「深い学び」につながるアクティブ・ラーニング、いかに導入し、いかに続けるか(2012年10月6日開催)」で報告された。内容は、3月に発行予定の河合塾の関連書籍に評価内容等の報告が掲載される予定。

◎第1回大東建託住宅コンペ(応募総

数483点)で、福島彰人君、遠田拓也君、地曳弘太君のチームによる作品が審査委員特別賞を受賞した。中島紀子さん、武末俊吾君、柘磨優樹君のチームも学生特別賞を受賞した。(最優秀賞1点、優秀賞2点、審査委員特別賞3点、その他入選8点、学生特別賞10点)



上/建築工学科卒業設計審査会のゲスト審査員孫啓榕先生(右)と顔敏傑先生(中)と中国科技大学特別賞を受賞した箕嶋小百合さん。左/「巣まい。路上生活者とすみだ」の模型



左/第1回大東建託住宅コンペで、審査委員特別賞を受賞した「1MDK」

◎石森祥太君(渡辺研M1)、市川恵理さん(山崎研M1)、番屋陽平君(佐藤(光)研M1)、矢嶋宏紀君(山中研M1)の「伸縮するデンによる空き教室の空間リノベーション」が、「住空間ecoデザインコンペティション Real Size Thinking」で最優秀賞を受賞した。このコンペでの最優秀賞の受賞は、理工学研究科建築学専攻では3年連続。毎年、大学院授業の「建築設計演習」としてコンペに取り組んでいる。「住空間ecoデザイン」をテーマに、「地球環境をサステナブルなものとして、子供や孫に残していくための『エコな住空間』を实践できる『空間・仕掛け』の提案」が求められた。

他にも、籠景美さん(佐藤(慎)研M1)、芳我まり子さん(今村研M1)、藤本陽介君(佐藤(光)研M1)、山崎周拓君(本杉研M1)の「ひらかれるハコ」が入

賞を受賞した。また、協賛企業賞として、原俊介君(横河研M1)、武久忠正君(同M1)、中田光君(渡辺研M1)の「防災玉手箱」がクリナップ賞を受賞、柳皓成君(本杉研M1)、伊藤由華さん(山崎研M1)、ジャン・ジマンさん(今村研M1)、矢板悟君(佐藤(光)研M1)の「Jungle Gym+」が積水ハウス賞を受賞した。

◎武久忠正君(横河研M1)の「組み替えられる住宅」が、「第2回リノベーションアイデアコンペ」(主催/一般社団法人リノベーション住宅推進協議会)で最優秀作品賞を受賞した。「リノベーションによる、新しい住み方」をテーマに、「空間・デザインのみならず、価値観、人間関係、メディア、流通など、幅広い視点で『住み方のあり方』の全体を“リノベーション”するような新しいデザインの定義や、突き抜けたビジネスモデルの提案」が求められた。



上/最終審査に残った4作品の原寸大モデル。奥が最優秀賞作品、手前が入賞作品
下/最優秀賞の「伸縮するデンによる空き教室の空間リノベーション」